

いわゆる人口問題の位相（3）

——ゴドウィン・マルサス論争（ii）

仲村政文

目次

I. 論点開示

1. 人口問題は“アポリア”か
2. 人口変動の「転換」をめぐる
3. 人口政策におけるイデオロギー問題
(以上 第71号)

II. 人口問題へのアプローチ

——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて

1. 時代の精神
(以上 第72号)
2. ゴドウィン批判と「人口の原理」
3. ゴドウィンの人間把握と「人口論」
(以上 本号)
4. マルサス人口論の基本的性格
——ゴドウィン批判に即して

III. マルクスにおける人口論の展開構造

IV. 「人的資源」論の射程

V. 人口変動の地域特性

VI. 少子高齢化「問題」の歴史的位相

——結びに代えて

II. 人口問題へのアプローチ

——ゴドウィン・マルサス論争に寄せて

2. ゴドウィン批判と「人口の原理」

人口（増加）と土地の生産（力）との、二つのこの力の自然的不平等（natural inequality）、およびそれらの結果をつねに等しくもたずにはおかない、われわれの自然のあの偉大な法則は、社会の完成可能性（perfectibility of society）の途上において、わたくしには克服不可能だと思われる大きな困難をなすものである。その他のすべての論点は、これと比較すれば、些細な副次的な問題である。すべての生命あるものを支配しているこの法則の重みから、人間がのがれることができる道を、わたくしは知らない。どんな幻想的平等（fancied equality）も、もっとも徹底したどんな農業上の規制も、一世紀の間でさえ、その圧力を除去することはできないであろう。それだから、この法則は、そのすべての成員が、安楽、幸福、および比較的閑暇のうちに生活し、そして自らと家族とに生存手段を提供することになんの不安も感じないような社会の存在可能性にたいして、決定的な反証であるように思われる。

したがって、もしそれらの前提が正しければ、論議は、人類の大多数の完成可能性にたいして、反対の結論になる。¹

（1）

上の一文はマルサス『人口論』第1章の末尾から引いたものであるが、文脈から推して、こ

¹ *An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society, with remarks on the speculations on Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers.* London: 1798. reprinted for the Royal Economic Society and published by Macmillan & Co. Ltd, 1926. pp.16-17. (以下、*Principle of Population* と略す) 永井義雄訳『人口論』中央公論新社、1973、24-25ページ。なお、永井訳を引用するにあたり、訳語および表記法を一部変えた。

の『人口論』における論議の結論を簡潔に提示したものと看做すことができる。マルサスによれば、人口と食糧との間の「自然的不平等」という自然の「法則」が貫くかぎり、人類の「完成可能性」や平等——「幻想的平等」と断ずべき——の実現は到底不可能であるといわざるをえないのである。

こうしたマルサス人口論の展開については以下、ゴドウィンと対比しながら具体的に吟味するが、それに先立って、時代状況および「時代の精神」との関連において、ここに二つの問題を確認しておきたい。

まず第一に確認すべきは、「序言」冒頭にのべられている一節の含意である。マルサスはのべる。「以下の論文の起源は、ゴドウィン氏の論文の主題、すなわち彼の『探求者』における貪欲および浪費について、一友人とかわした会話にある。その討議は、社会の将来の改善という一般的問題をうみだした²と。この叙述からも窺えるように、また、その副題からも窺えるように、この『人口論』は何よりも、「社会の将来の改善という一般的な問題」にかかわるゴドウィンの理論——というよりもむしろ、その思想——の批判を企図したものであることは明白であるが、ここで特徴的なことは、「人口の原理」を定立しつつ批判の矢を放っているということである。マルサスにおける人口論の展開はまさしく、そうした批判のための武器として用いられているのである。マルサスにあっては、ゴドウィンらの主張する「人間と社会との

完成可能性」の途上における「諸困難」についてのべることが人口の原理（『人口論』）の「目的」とされているのである。

もちろん、マルサス自身ものべているように、こうした「重要な論議」は決して目新しいものではなく、R.ウォーレス (Robert Wallace, 1697-1771) に負っているのであるが³ (ウォーレスにおける<人類の完成可能性 (perfectibility) と人口>の問題については、ゴドウィンの人口論との関連において、改めて後にふれる)、先学とは「ある程度ことなる観点」から目的意識的にこの問題にアプローチしているという点において際立っている。ここで「目的意識的」というのは、マルサスは的確な時代認識にもとづき、先のいわゆる「社会の将来の改善という一般的問題」にアプローチしているからである。第一章冒頭において次のようにのべている。「自然哲学において最近生じた大きな予想外の諸発見、印刷術の伸張による一般的知識の普及増大、教養ある社会にさえ浸透している熱心でとらわれない研究心、政治問題にたいして投げかけられた、理性を幻惑し驚嘆させる、新しい驚くべき光、また特に政治の領域における途方もない現象、すなわち炎をあげる彗星のように、新鮮な息吹と活気とを吹きこんで鼓舞するか、あるいは地上の多くの住民たちを焼き焦がし、破滅させるのかのいずれかを運命づけられているように思われるフランス革命、これらのすべてのことが、ともに生じ、もっとも重要な諸変革、すなわち人類の将来の運命をある程度決定する

² *Principle of Population*, p. i. 永井訳, 11ページ。ただし、『研究者』を『探求者』に改めた。なお、ここにいる「一友人」は、マルサスの父ダニエル・マルサスである (J. Bonar, "Notes on Malthus's First Essay" in *Principle of Population*, p. iii. ジェームス・ボナー「マルサスの第一論文について」[高野岩三郎・大内兵衛訳『初版 人口の原理』岩波文庫, 1936, 所収] 247ページ, 参照)。

³ *Ibid.*, p.8. 永井訳, 20ページ。

と思われる諸変革をはらむ時期にわれわれが到達しつつあるという意見に、おおくの有能な人びとを導いたのであった。』⁴ ここでマスサスは、時代状況と「時代の精神」とに説き及んでいる。そして、「また特に」という文言からも窺えるように、フランス革命およびそれをめぐる状況に特別に関心を寄せている。われわれは前節において、ゴドウィンとマルサスの時代における「時代の精神」におけるフランス革命の意義に論及したのであるが、このフランス革命はマルサスにとっては、「人類の将来の運命」にかかわる「途方もない現象」にほかならないのである。

上の一文においてマルサスは、フランス革命のもたらす「運命」についての判断を保留しているのであるが、別の箇所において、ゴドウィンの「人間の完成可能性」を批判するなかで明確に次のようにのべている。「……フランス革命を実現し、人間精神によって大きな自由と活気とを与えるために用いられた促成肥料は、あらゆる社会の抑制的紐帯であった人間性という萼を破ったし、またそれぞれの花卉はどれほど大きく成長したとしても、たとえそのうちの僅かなものが際立って強く、あるいは美しくさえなったとしても、全体はいまや、結合、均斉、あるいは色彩の調和のない、緩んだ、歪んだ、まとまりのない大衆である。』⁵ と。この一節をマルサスの上の二分法にそくして読み解くとすれば、フランス革命は「新鮮な息吹と活気とを吹きこんで鼓舞する」のではなく、「住民たち

を焼き焦がし、破滅させる」というに「運命づけられ」ているということである。また、マルサスはA.N.コンドルセ (Marie Jean Antoine Nicolas de Caritat, Marquis de Condorcet 1743-1794) の「人間の有機的完成可能性」を厳しく批判する一章を結ぶにあたり、敢えて次のようにのべている。「コンドルセ氏の著書は、一人の高名な人の見解の素描としてだけでなく、革命開始期のフランスの文筆家たちの多くのもののそれと考えられていいであろう。このようなものとして、たんに素描ではあるけれども、それは注目にあたいするように思われる」⁶ と。この一文からも窺えるように、マルサスのコンドルセ批判はフランス革命開始期の理論家たちへの批判にほかならないのである。このように、マルサスによるフランス革命の否定的評価は明快であり、「マルサスがフランス革命にどう対応したかは、はっきりしません」⁷ とする見解は首肯しがたい。

マスサスはこうした時代状況と「時代の精神」を確認した上で、当時の中心的な問題についての「論争」について、次のように評する。「現在、次のような大きな問題が論争中である、といわれている。人間はこれから加速的に、無限の、これまで考えられたことのないほどの改善にむかって、前進するであろうか、あるいは、幸福と不幸とのあいだの永遠の往復運動を運命づけられており、あらゆる努力にもかかわらず、念願する目標からはなおはかりしれないほどの距離にとどまっているであろうか、という問題

⁴ *Ibid.*, pp.1-2. 永井訳, 16-17ページ。

⁵ *Ibid.*, p.274. 永井訳, 161ページ。

⁶ *Ibid.*, p.172. 永井訳, 108ページ。

⁷ 高島善哉・水田洋「対談 保守主義の考え方」『世界の名著』第34巻 [パーク／マルサス] (中央公論社, 1969) 付録, 10ページ。

である」⁸と。そして、こうした「大きな問題」は「苦痛にみちた不安」をうみだしており、その「終了」（解消）は「切迫した問題」となっているという。そうであるにもかかわらず、これをめぐる「論争」は、マスサスによれば、論点を絞りきれていないし、「結論」に近づいているとは思われないのである。

マルサスはこのような脈絡において改めて、ひとつの論点、すなわち、社会の「改善」の途上に横たわる、克服不可能な「困難」として人口（増大）という問題を、後述のようにウォーレスに倣って、ここに提示するのである。そして、これを敷衍することが、先にも言及したように、マスサス人口論の「目的」なのであり、ゴドウィン批判の「武器」にはほかならないのである。したがってまた、フランス革命の理念の方向性への批判の武器ともなるものであり、マルサスにあっては、「人類の将来の運命」を解き明かすことにほかならない。

こうしたマルサス人口論の「目的」をここに特別に確認するのは、多くの人口論にあっては、マスサスが直接に人口に説き及んでいる部分——人口についての二つの「公準」や三つの命題など（後述）——のみを『人口論』から抽出して論じているからである。このようなやり方は方法論として誤りであるだけでなく、マスサス人口論の性格（本質）を十全に把握することはできないであろう。また、マルサスの『人口論』は「人口論の叙述」「平等主義の批判」「従来の人口論批判」という三つの「内容」を含んでいるとする見解⁹も首肯できない。この見解は『人口論』の内容をマスサスの叙述の順序に

そって整理（分類）しているにすぎない。だが、マスサスの『人口論』はあくまでも「平等主義の批判」の書にはかならず、その武器として人口論（「人口の叙述」）があるのであって、これに随伴して「従来の人口論批判」が少しばかり展開されているということである。このばあい、第一章および第二章において、「人口の原理」を提示しつつ平等主義批判の結論を導出し、第三章以下において論証を試みているのである。『人口論』の構成と論述は、以下にみるように、論理的であるか否かについては措くとしても、極めて整合的である。

(2)

もうひとつ、ここで確認しておくべきは、マルサスの『人口論』は匿名のパンフレットとして刊行されたものであるということである。この点に関して、聖職にあるマルサスが、人口調査そのものを「白眼視」とするという風潮のなかで、人口問題という題目を論ずることは「神経過敏な世人にショックを与えるかもしれない」という点を配慮したものであるという見解がある¹⁰。確かに、こうした一面も否定できないが、より重要なことは、当時の出版をめぐる状況であり、よい広いえば、フランス革命をめぐる時代状況と「時代の精神」である。

当時の時代状況と「時代の精神」については、前節においてふれたところであるが、改めてここで指目すべきは、ゴドウィン自身の次のような叙述である。「この書が現れる時期は、異常なものである。イングランドの人びとは、彼ら

⁸ *Principle of Population*, pp.2-3. 永井訳, 17ページ。

⁹ 白井厚『ウィリアム・ゴドウィン研究』未来社, 1964, 157ページ参照。

¹⁰ T. R. マスサス『マスサス人口論綱要』小林時三郎訳（未来社, 1959）, 「解説」84ページ, 参照。

の忠誠心を宣言し、そして憲法の合言葉を承認しようとし、人びとをすべて憎むべき人間としてマークしようと、一生懸命であった。あえて異端の説を表明しようとする人びとを起訴する費用にあて、かくして政府権力と個人の憤りの双方によって彼らを抑圧するために、資金が自発的な醸金によって調達されている。……われわれの自由に対するこのような驚くべき侵害に加えて、一冊の書物が、……行政権力の手の下に屈服することになるかどうか、今や試されるべきである。心の活動を抑え科学の探求を止めさせるような試みがなされるかどうか、試されるべきである。……著者がどんなことがあってもなさねばならぬと考えている義務は、真理の進歩を助けることである。』¹¹ この一文は、ゴドウィンの代表的な著作である『政治的正義』初版の「序言」から引いたものであるが、ここで敢えて注釈を加える必要もないであろう。ここには、反体制的な出版物に対する呵責のない弾圧の状況が赤裸々に綴られている。マルサスは、先に引いた『人口論』序言の冒頭において、この『人口論』の起源はゴドウィンの『探究者』であるとしているが、実際には『政治的正義』を中心に批判を加えており、上の一節もマルサスの目に留まったに違いない。

マルサスの『人口論』が刊行されるのは、ゴドウィンの友人やゴドウィンの熱烈な支持者の

多くを擁するロンドン通信協会などがW. ピットの弾圧にさらされている最中だったのである（この通信協会は、『人口論』刊行の翌年に解散を余儀なくされた）。こうした状況のもとで、ゴドウィン批判をストレートに展開した書を上梓することは明らかに、「政府権力」の「憤り」に組みすることを意味する。また、先にもふれたように（本誌72号所収拙稿、参照）、若い知識人たちがゴドウィンの思想を熱狂的に支持していたということも無視できない。ゴドウィンは当時、「もっとも有名な社会哲学者になっていた」¹² のである。

こうしたなかで、マスサスが実名を明らかにすることを躊躇したとしても、何の不思議もない。さらに付言すれば、マルサスは「序言」において、人間生活についての著者の見解は、「陰鬱な色彩をおびている」ことを認め、この「色彩」は「ひがんだ目」あるいは「生来の悪質な性格」からひきだされたものではない旨をのべている¹³。これはひとつの弁明にほかならないが、一方、マルサスは巻末において、「害悪が世界に存在するのは、絶望を生むためではなく、活動をうむためである」¹⁴ とのべ、自らの見地の「陰鬱な色彩」を反転させている。だが、こうした言説は牽強附会との謗りを免れないであろう（この問題については後に、改めてふれることになる）。こうした点はマスサス自身

¹¹ *Enquiry concerning political justice and its influence on morals and happiness, by William Godwin*, photographic facsimile of the third edition corrected, edited with variant readings of the first and second editions and with a critical introduction and notes, by F. E. L. Priestley, Vol. I, p.xi. (以下、*Political Justice* と略す) 白井厚訳『政治的正義（財産論）』陽樹社、1973、17-18ページ。この白井訳は第3版の第8編のみを訳出したものである。引用にあたっては、訳を一部改めた。なお、初版の邦訳として、加藤一夫訳『政治的正義』（世界大思想全集17、春秋社、1930）があるが、かなり省略されており、抄訳というべきである。

¹² M. Beer. *A history of British socialism*, 1919. reprinted in 1953 (Allen & Unwin), Vol. 1, p. 114. 大島清訳『イギリス社会主義史』岩波文庫、(一)、1968、206ページ。

¹³ *Principle of Population*, p. iv. 永井訳、14-15ページ。

¹⁴ *Ibid.*, p.395. 永井訳、222ページ。

によって意識されていたのかどうかは別にして、匿名問題にかかわっているとみてよいのではないか。

いずれにせよ、マスサスが『人口論』の初版を匿名で上梓するについては、様々な背景が考えられるが、『政治的正義』と『人口論』をめぐる状況はその後、一変する。ゴドウィンの評価の低落に反比例するかのように、マスサス人口論の評価が高まり、広く受容されるのである。

以上みてきたように、マスサスの『人口論』は「人口の原理」を武器にして「社会の将来の改善」にかかわるゴドウィンの理論と思想とを——併せて、フランス革命の理念をも——葬り去ることを企図するものであり、結局するに、平等社会（「平等な制度」）存立の困難性を論証するために、人口（増加）と土地の生産（力）との「自然的不均等」という「自然法則」を導出するにいたるのである。

マルサスはこの「人口の原理」を定立するにあたり、まずもって、次のような二つの公準（postulata）を措定する¹⁵（第一章）。

第一、食糧は人間の生存に必要であること。

第二、両性間の情欲は必然であり、ほぼ現在のままでありつづけるとおもわれること。

そして、人口と生存手段の増加率を「経験の結果」によるものとして、前者は等比数列において、後者は等差数列において増大することを提示する。

こうした公準を前提として、さらに、三つの命題（proposition）を提示する¹⁶（第二章）。

① 人口は生存手段なしに増加できない。

② 生存手段があるところでは、人口は絶え

ず増加する。

③ 人口の優勢な力は、「悲惨（misery）」または「悪徳（vice）」を生みださないでは抑制されない。

マスサスは、これら三つの命題の「正当性」を「確定」するために、第三章以下において、ゴドウィンらの所論を批判しつつ議論を展開するのである。こうしたマルサスの展開の道筋をここに確認して、以下、マルサスのゴドウィン批判およびゴドウィンの反批判について吟味するとしよう。

3. ゴドウィンの人間把握と「人口論」

富は、一時期において、粗野な未開の心に現れたほとんどの唯一の追求の対象であった。今後は、自由を愛する心、平等を愛する心、芸術の探求、知識欲というさまざまな目的が、人びとの注意を分割するであろう。これらの目的は、今のように少数者に限られるのではなく、すべての人に次第に解放されるであろう。自由を愛する心は、明らかに連合の感情（sentiment of union）へ、そして他人に関することに同情する気質へと通じるであろう。真理の一般的な普及は、一般的な進歩を生むであろう。そして人びとは、あらゆる対象をその真の価値によって評価するような観点に、日々接近するであろう。これに加えて、われわれが語る進歩は公的なものであって、個人的ではない。この進歩は、すべての人の進歩である。各人は、自分の正義と公正の感情が、隣人たちの感情によって唱和されるのを見いだすであろう。¹⁷

(1)

ここに引いた一節は、ゴドウィンの平等思想のエッセンスを開示したものとみることができ。ゴドウィンの理想とする未来社会——自由で平等な社会——における人びとの自由と平等

¹⁵ *Ibid.*, p.11. 永井訳, 22ページ。

¹⁶ *Ibid.*, pp.37-38. 永井訳, 36ページ。

¹⁷ *Political Justice*, Vol. II, pp. 552-553. 白井訳, 124ページ。

を愛する「心」や芸術の探求、知識欲などについて、また、真理の普及による「一般的進歩」について、さらには連合や正義・公正などの「感情」について、総じていえば、人間精神のむかう方向について文学的に叙述されている。ゴドウィンは『政治的正義』において、「平等な制度 (a system of equality) という言葉を用いながらも、具体的にその制度についてはのべていないが、ここにはその理念が簡潔に語られているといえよう。すなわち、「富」「自由」「平等」「連合」「芸術」「知識欲」「真理」「進歩」「正義」「公正」などのキーワードが鏤められており、ゴドウィンの思想の核心部分が開示されているのである。

われわれがまずもってゴドウィンの未来社会にふれるのは、ゴドウィンにおける人口問題は専ら、自らの展望する未来社会の「平等な制度」（生活における財産の平等な分配）〔後述〕との関連において論じられているからである。つまり、ゴドウィンはこの問題を特殊な文脈において論じているのである。そして、マスサスの批判の対象となった『政治的正義』においては、二つの側面からこれに論及している。

ひとつは、「人口の減少」という問題である。この「人口の減少」は、ゴドウィンによれば、従属意識、不正義、知的進歩の妨害、悪徳の増大などととも、「既存の財産制度」（私有財産制度〔仲村〕）から生ずる「害悪 (evils)」——「弊害 (mischiefs)」——にほかならない（他の「害悪」ほど重要ではないが）。そして、これらの「害悪」は「平等な制度」の形成によって除去されるのであり、こうした点において、「平

等な制度」の「利益 (benefit)」のひとつがあるという。

「既存の財産制度」における「人口減少」という「害悪」について、ゴドウィンは次のようにのべている。「ヨーロッパの通常の耕作は、その現在の住民数の五倍を維持するほどに改善されるかもしれない、と計算されてきた。人間社会には、人口は絶えず生存手段の水準に引き下げられているという一つの原理がある。……ヨーロッパの文明諸国の間では、土地の独占によって、生存の源はある限界の中に押さえられ、そして、人口が多すぎるようになったなら、下層の住民たちは、自分たちのために生活の必需品を獲得することがなほ不可能となるであろう。……かくして、既存の財産管理制度は、われわれの子供のかかなりの部分を、その揺籃期において絞め殺すと考えられよう。人間の生命の価値が何であろうとも、あるいはさらに自由平等な社会になれば人間の幸福の可能性がどんなに大きいものであろうとも、われわれが反対している制度は、その価値をその幸福の五分の四を、生存の門出において押しつぶすものだと考えられる。」¹⁸（下線は仲村）一瞥して明らかのように、ゴドウィンはここで、「土地独占」のもたらす貧困は人びとを意識的な人口抑制へと駆り立てるということを強調しているのであるが、他の箇所において、「棄子」「墮胎術」「両性の乱交」「組織的な禁欲」など、歴史上の「習慣」を挙げつつ、この種の「明白な習慣」がなくても、共同社会の「一般的な状態から生じる刺激や抑制」の作用は「全能」であることを示唆している¹⁹。このことを確認して、この叙述を少

¹⁸ *Political Justice*, Vol. II, pp.466-467. 白井訳, 62-63ページ。

¹⁹ *Ibid.*, pp. 517-518. 白井訳, 100-ジ。

しばかり敷衍すれば、次のようになろう。

ゴドウィンによれば、人口は「耕作」の「改善」の度合いに照応した「生存手段の水準」に引き下げられる。つまり、人口水準と生存水準とは「均衡」するという傾向性をもつのであるが、ゴドウィンはかかる傾向性を人口の「一つの原理」（「人口の原理」）として措定する。ゴドウィンはマスサスに先行してここに、「人口の原理」という範疇を析出しているのである²⁰。ゴドウィンのいう「人口の原理」とマスサスのそれとの異同についてはさしあたり措くとして、ゴドウィンはここで、人口が増加するばあいにも、「耕地」の「改善」によって、ひとつの「均衡」が成り立つということを黙示的にのべているといえよう。こうした「ひとつの原理」が存在するにもかかわらず、ゴドウィンによれば、現存の社会制度（不平等な「財産制度」）においては、「土地の独占」によって「生存の源」（＝耕作）はある限界のなかに押し込められるので、農民は困窮し、嬰兒殺しなどによる人口抑制がおこなわれることになるのである。

ところで、ゴドウィンはここでは「土地の独占」の齎す耕作制限について敷衍していないが、初版においては、次のような叙述がみいだされる。「いずれの国の人口も、その耕作によって測られることはすでにみたところである。したがって、もしも人びとをして農業に励むために十分な動機が与えられるならば、疑いなく、人口は、土地が扶養できる程度まで、増加し続けるであろう。……土地の独占 (territorial monopoly) はまさしく、人びとが已むなく広大な土

地を無駄にし、あるいは怠慢にかつ不十分に耕作することを余儀なくするのであり、かくして、人びとは不足の悲惨に見舞われるのである。もしも土地がそれを耕作したい人に永続的に解放されているならば、その土地は社会の必要に比例して耕作されるであろうし、同じ理由から、人口の増加に対する有効な抑制など存在しないであろう²¹と。みられるように、「土地の独占」のもたらす弊害（未耕地の存在）とともに、黙示的に、土地の平等な配分とそれにとまなう人口抑制手段の消滅を展望している。こうした主張、すなわち、現存社会（私有財産制度）は「人口減少」をもたらすという主張は明らかに——ゴドウィン自身は明示していないのだが——、ウォーレスの所論に示唆を受けているといわなければならない（もちろん、視点と展開は次にみるように、かなり相違しているのであるが）。そこで、この点を明らかにするために、必要なぎりにおいて、ウォーレスの主張するところ（およびD. ヒュームのウォーレス批判）をみるとしよう。

ウォーレスは近代社会における人口の「減少」と古代社会における人口の「増加」という歴史的過程を分析しつつ議論をすすめる、その原因を究明することに力を注ぐ。ウォーレスによれば、「人口減少」の原因は自然的原因と道徳的原因とに分けて考える必要がある。前者の自然的原因としては、気温（極寒、酷暑など）、不毛な土地、さらに、気候の荒れ、疫病、飢饉、地震、津波などがある。後者の道徳的原因としては、多くの破壊的な戦争、極貧、放縦、酒色、奢侈、

²⁰ 併せて、南亮三郎「人口論者マルサス」『経済学論纂』第7巻第1・2合併号（マルサス生誕二〇〇年記念号）、中央大学経済学研究会、1966.3、所収、112ページ、参照。

²¹ *Political Justice*, Vol. III, p.333. この一文は、後に大幅に書き改められた初版第8編第3章から引いたものである（第3版〔プリーストリ版〕に付録として収録）。邦訳は仲村。

さらには結婚を妨げるもの、育児や土地改良の能力の喪失などがある²²。かなり恣意的に列挙されているが、「奢侈」以下の要因は色合いを異にしている。そして、次にみるように、ウォーレスはこれらのなかで特別に「奢侈」に指目している。

ウォーレスはのべる。「古代においては、趣味の素朴さ、質素、労働の根気、小さな満足などの故に、人口が多かったのである。近代においては、これらの美德が衰退し、退廃的で贅沢な趣味が広がることによって、人間の数〔人口〕が大きく減少することとなったのである。』²³ 続いてウォーレスは、この「人口減少」の原因として、奢侈品に多くの人手（hands）が使われるため、生活必需品が不足し、高価になるという点を挙げている。だが、かなり抽象的である。他のいくつかの箇所においてこの点についての説明がみいだされるが、次の叙述が論理的にもっとも明快である。「……巨大な成長しすぎた都市は独特な仕方世界で世界の人口増加にとって破壊的である。というのは、これらの都市は奢侈を育み、あらゆる階層の人びとを大量に吸引し、都市以外の地域から有用な働き手（labouring hands）——さもなくば、農業や必需品工芸（necessary arts）に従事するであろう働き手——を排出するのだから。」²⁴

ここでは都市における奢侈（奢侈品工業）は

まさしく、農村の有用な労働力を吸引し、農業と必需品製造の衰退をもたらすというのである。ウォーレスのいう必需品は食品や衣服、住宅、小さな調度品などを指示しているのであるが、このような必需品もこれらを製造する労働力の移動により、生産量の減少と価格の騰貴を招くとともに、「労働の価値」を高めるという²⁵。こうして、さまざまな人びとの「注意を必要な労働からそらし」、人口の増加を妨げることとなるのである²⁶。少しばかり敷衍すれば、工業生産（manufactures）が拡大すると〔労働力の流出により（仲村）〕、農村はその趣味が質素であるばあいと比べて、多くの未耕地を抱え込むこととなり、人びとを扶養する農業生産の縮小が不可避となる。そして、結婚もまた妨げられる²⁷。こうして、その帰結するところは、人口の減少にほかならないのである。

さらに刮目すべきは、ウォーレスはこの未耕地問題に留まらず、土地の配分問題に踏み込んでいるということである。ウォーレスは古代と近代の人口（人口の増減）を比較するなかでこの問題に論及しているのであるが、すべての国における民衆の数（人口）は土地の分割の仕方における民衆の数（人口）は土地の分割の仕方に依存するという見地から、次のような結論を導出している。「土地がほぼ平等に分割されて平等に保有され、それらの土地はつつましく、簡素な生活を営んでいる働く人びと（labourers）

²² R. Wallace, *A dissertation on the numbers of mankind, in ancient and modern times*, Second edition, revised and corrected, 1809 (First edition 1753), reprinted by A.M. Kelly, 1969 .pp.12-13. (以下、*A dissertation on the numbers of mankind* と略す)

²³ *Ibid.*, p.162.

²⁴ *Ibid.*, pp. 22-23.

²⁵ *Ibid.*, pp.24.

²⁶ *Ibid.*, pp.25.

²⁷ ウォーレスは短絡的に次のようにのべる。「いたるところで未耕地が放置され、食糧やあらゆる必需品が欠乏し高価になる。このことはまたもや、結婚を妨げる。なぜならば、多くの人びとは家族の扶養を引き受けず、酒色と情事に身を入れるであろう。」(*Ibid.*, p. 117.)

にたいして、必要な量をわずかに上回るほどしか食と衣服を給することはできないとしても、また、外国の人びとと交易する余地は殆どなく、単純で必要な技術以外は殆ど用いられないとしても、その国の自然が肥沃であれば、必ずや多くの人口が扶養されるに違いない。²⁸ そして、ウォーレスによれば、土地が不平等に分割されるばあいであっても、「技術 (arts)」や「科学 (sciences)」が奨励されていれば、人口は減少しないという。そうでないばあい、人口は「減少」するのである。

こうしたウォーレスの人口論は、D. ヒューム (David Hume 1711-1776) の手厳しい批判をうける。ヒュームは古代と近代における人口の豊かさの比較の問題にアプローチし、多くの文献を紐解きながら、古代の人口の方が近代より豊かであったとする説を徹底的に批判する。このばあいヒュームは、疫病などの自然的原因よりも道徳的原因 (moral causes) [社会的原因] を重要視する。なぜならば、「他の条件がまったく同じならば、最高の幸福と徳、さらに最も賢い諸制度が存在するばあい、最も多くの人口 (people) が存在する……」²⁹ からである。ヒュームはさらに、社会的原因から説明するために、

家庭状況および政治状況という二つの側面から古代と近代における人口動態を吟味する。

このうち家庭状況についてヒュームが特別に指目するのは、奴隷制度である。そして、ヒュームは奴隷制度が人口増加にたいしていかに「破壊的」であるかについて例証しつつ、次のような結論を導き出している。「……奴隷制度は人類の幸福と人口増加のいずれにとっても一般的に不利益であり、召使の雇用という慣行に取って代わられたほうがずっとましである。」³⁰ こうした批判にたいしてウォーレスは反批判を試みているが³¹、それは所詮、説得力をもつものではなかった。

さらにヒュームは、古代と近代における政治的な習慣と制度について検討を加える。ヒュームがまず注目するのは、近代の戦争よりも「破壊的な」古代の戦争であり、さらに残虐や暗殺の横行である。これらは直接的に人間の肉体を抹殺することにより、「人口減少」をもたらすことは自明のことなのであるが、ヒュームにおいて肝要なのは人類の「幸福と増殖」にとって、近代の「商業 (trade) や工業 (manufactures), インダストリ (industry)³²」はどのような意義を有するかという問題であった。ヒュームは次の

²⁸ *Ibid.*, p. 17.

²⁹ D.Hume, "Of the populousness of ancient nations" in *Essays, moral, political and literary*, by David Hume, (first published 1741 and 1742), Oxford University press, 1963. p. 385. 小松茂夫訳『市民の国家について』(上) 岩波文庫, 1982, 49-50ページ。ただし、訳文はかなり変えた (以下、同じ)。

³⁰ *Ibid.*, p. 396. 小松訳 (上) 63ページ。

³¹ R. Wallace, "Additional observations concerning the numbers of mankind in ancient and modern ages: with some remarks on Mr. Hume's Political Discourse", in *A dissertation on the numbers of mankind in ancient and modern times*, op.cit., p.165ff.

³² "Of the populousness of ancient nations" op.cit., p. 414. 小松訳 (上) 84ページ。ヒュームにおいて類出する "industry" というタームは "arts" とともに、産業革命の前夜においては、かなり多義的であり、曖昧である (当時の用語法については、田中敏弘「デイヴィッド・ヒュームの経済理論——そのライト・モチーフとしての」インダストリイ《——》『経済学論究』(関西学院大学) 第13巻第2号, 1959, 40-41ページ参照)。「industry」というタームは、今日、「勤勉」「努力」などというように、労働主体の属性を表わすとともに、「工業」や「産業」などを意味する。レイモンド・ウィリアムズによれば、「industry」は15世紀以来、前者の意

ようにのべる。「商業や手工業がないばあいでも、農業が繁栄する事例もかなりあるとしても、多くの地区において、長い期間にわたり、農業は、それだけで、やっていけると結論づけることは、正しい推論であろうか。農業（husbandry）を奨励する最も自然なやり方は、まずもってほかの産業を振興し、そのことによって農業従事者に手取り早い農産物市場を提供し、快楽（pleasure）や享楽（enjoyment）に役立つような物品を手に入れることができるようにすることである。こうした方法は決して誤ることのないものであり、普遍的なものである。そして、この方法は古代の政府よりも近代の政府においてより一般的であるので、近代の人口が優れて豊かであることが推定される。」³³（下線は仲村）みられるとおり、ここでヒュームはウォーレスの「古代人口優勢」論を念頭におきながら、農業の衰退ではなく、農業の発展を主張している。その論拠として挙げられているのは、農産

物市場の形成と「快楽や享楽に役立つような物品を手に入れることができるようになる」ということである。

まず、後者についてみると、ヒュームがここでいう「快楽や享楽に役立つような商品」は、われわれの文脈に即していえば、奢侈品を指示しているとみてよい。ヒュームによれば、奢侈（luxury）は「五官の満足における高度の洗練（refinement）」³⁴ であるとして、奢侈と洗練とをほぼ同義と看做している。因みに、ヒュームは「悪しき奢侈（vicious luxury）」にもふれているが、これを一掃しながら、怠惰や無頓着を放置すれば、“インダストリ”の減退を招くという³⁵。

この奢侈の問題に関連して、われわれが指目すべきは農民の「欲求」の問題である。ヒュームがこの問題に直截に言及しているのは、瞥見するかぎり、次の一節においてである。ヒュームはのべる。「土地の所有者や耕作者たちの欲望と欲求（desires and wants）がより少なけれ

味で使用されていたが、18世紀から後者の意味をもつようになり、1840年代に「一般的なもの」になったという。そして、以後、前者の意味は「副次的なもの」になった（R. ウィリアムズ『キーワード辞典』[Raymond Williams, *Keywords: A vocabulary of culture and society*, 1971.] 岡崎康一訳、昭文社、1980、191-195ページ、参照）。本稿においては“インダストリ”と表示し、労働主体のポジティブな意欲・能力を示すタームとして用いた。

³³ *Ibid.*, pp. 416-417. 小松訳（上）87-88ページ。

³⁴ D. Hume, “Of refinement in the arts” in *Essays, moral, political and literary*, op.cit., p. 275. 小松訳（下）30ページ。

³⁵ *Ibid.*, pp. 286-287. 小松訳（下）48-49ページ。因みに、ゴドウィン『政治的正義』において1章を割いて奢侈について論及している（第3編第7章）。そのなかで奢侈が「美德」であるか「悪徳」であるかという問題にふれて、次のようにのべている。「もしわれわれが、他人の不当な窮乏および不公平な負担という犠牲のもとに誰かによって独占的に享楽されるものを奢侈だと理解するならば、その時われわれが奢侈にふけることは、悪徳である。しかし、……われわれが健全な健康な生活を維持するのに必ずしも絶対に必要だというのではない便宜品をすべて奢侈だともし理解するなら、奢侈を獲得しそれに与えることは、美德であろう。美德の目的は、快い感覚の総量を増すことにある。美德の標準と基準は、われわれは多くの個人の快楽を得るのに用いられたかもしれない労働を一個人の快楽を得るために当てない、という公平さである。……われわれはただ生きることを学ぶべきではなく、われわれが最大多数の純粋な、そして実質的な楽しみを伴った生活を充足するように生きることを、学ばなければならない。」（*Political Justice*, Vol. II, pp.492-493. 白井訳、82ページ）まさしく功利主義者に相応しく、ゴドウィンは「快楽」の充足という観点から奢侈の積極的意義を説いている。ただし、平等主義者としてのゴドウィンの顔もまた、ここに顕れている。併せて、*Political Justice*, Vol. II, p.435. 白井訳、40ページ、参照。

ば、彼らが働かせる工業従事者は少なく、……」³⁶と。ここでは農民の「欲求」の大きさや工業の発達との関連が指摘されており、その「欲求」が大きければ、工業が発達するであろうことを暗示している。つまり、農民の「欲求」の解放の重要性が示唆されているのである。先の「快楽や享楽に役立つような物品を手に入れることができるようになる」とする叙述もこうした文脈において、読み取ることができよう。いうまでもなく、奢侈品を「手に入れる」ためには、農業生産力の増大による余剰農産物の産出、さらに農産物市場の形成が前提とされる。

ヒュームはまた、外国貿易が「欲求」の開放に及ぼす影響について次のようにのべる。「歴史を紐解いてわかることは、ほとんどの国において、外国貿易が国内工業における洗練に先行し、国内の奢侈を生み出しているという事実である。……かくして、人びとは奢侈からえられる様々の快楽の味と商業の利益とを知るようになり、趣味の繊細さやインダストリ (delicacy and industry) が覚醒すると、内外の交易のあらゆる部門において改良 (improvement) を促進するようになる。」³⁷

こうしたヒュームの議論は、カール・マルクスの欲求論と通底しているといえよう。マルクスは次のようにのべている。「消費は新しい生産にたいする欲求をつくりだし、……。消費は生産の衝動をつくりだす。生産が消費の対象を

外的に提供することが明らかだとすれば、消費が生産の対象を、内的な像として、欲求として、衝動として、目的として、観念的に措定することもまた同様に明らかである。……欲求がなければ生産もない。しかし消費は欲求を再生産する。」³⁸ここでマルクスは「消費は生産の衝動をつくりだす」とのべるのであるが、一方ヒュームは「この世界に存在するものはすべて、労働 (labour) によって取得される。そして、われわれの情念がそのような労働の唯一の原因である。ある国民がさまざまな製造業と機械的技芸 (mechanic arts) とを豊富にもっているばあい、農民のみでなく、土地所有者もまた農業をひとつの学問として研究し、インダストリと配慮とを倍加させる。彼らの労働から生み出される余剰生産物は無駄には使われない。人びとの奢侈 (luxury) によって欲するものをもとめて工業製品と交換するのである」³⁹とのべる。

こうしてみると、ヒュームは奢侈品工業の農業生産への影響を二つの面から捉えていることがわかる (ヒューム自身はこのことを整序的に展開しているのではないが)。ひとつは、工業の技芸 (arts) の農業生産へ及ぼす影響であり、もうひとつは、奢侈 (奢侈品) が農民の「欲求」を刺激し解放するという面である。その結果、農業における技芸の発達、したがって農業生産力の発達が促進されるとともに、「余剰となった人手 (superfluous hands)」と「土

³⁶ D. Hume, "Of commerce" in *Essays, moral, political and literary*, op.cit., p.262. 小松訳 (下) 11-12ページ。

³⁷ *Ibid.*, p. 270. 小松訳 (下) 22ページ。

³⁸ K. マルクス『一八五七-一八五八年の経済学草稿』第1分冊 (マルクス『資本論草稿集』①), 資本論草稿集翻訳委員会訳, 大月書店, 1981, 37ページ。なお、次の叙述が看過されてはならない。「必需としての、欲求としての消費は、それ自体生産的活動の内的な契機である。しかし、後者 [生産的活動] は実現の出発点であり、それゆえまた実現の包括的な契機であり、……」(同前, 41ページ)。マルクスの欲求論 (自然的欲求, 社会的欲求など) については、仲村『分業と生産力の理論——史的唯物論と生産力——』青木書店, 1979, 176-190ページ参照。

³⁹ "Of commerce", op.cit., p. 267. 小松訳 (下) 17-18ページ。

地の余剰生産物（superfluities of land）が生み出される⁴⁰。もちろん、ヒュームにあっては、農業生産力の増大は常に他律的であるのではなく、「土地所有者もまた農業をひとつの学問として研究し、インダストリと配慮とを倍加させる」とする叙述にもみられるように、農民の主体的・能動的な活動（「インダストリ」）——工業に限定されない“インダストリ”——も積極的に位置づけられている。したがって、工業の発達と農業の発達とが円環的に影響を及ぼしあいながら技芸と生産力の発達を促すのである。総じていえば、技芸の「同伴者」であり、心身の双方にたいし「新しい活力」をあたえる“インダストリ”⁴¹の意義が特別に強調されているということである。このことは特別に刮目されて然るべきである。

ヒュームはまた、こうした過程を歴史的に概観して、次のようにのべる。「すべての国家の民衆の大部分は、農業従事者と工業従事者とに二分できる。前者は土地の耕作に従事し、後者は前者の供給する原料を加工して生活に必要な物品または装飾的な物品〔奢侈品〕を生産する。主として狩猟と漁撈とによって生活をいとむ未開状態（savage state）から脱すると直ちに、この二つの種類の仕事に従事するようになる。もっとも、最初は、農業の技芸（arts）が社会の大多数の部分吸収するのだが。時間と経験はこれらの技芸を大きく進歩させるので、土地は、耕作に直接従事する人びとや彼らに必要な工業製品を供給する人びとを養うだけでなく、

はるかに多数の人びとを容易に養うことができるようになる。」⁴²（下線は仲村）この叙述もまた、ウォーレスの所論へのひとつの反論とみることができるが、いずれにせよ、ヒュームここでは、農工分離による社会的分業の拡大と商工業の発達、さらには、このことに随伴する農業生産力の増大と労働力人口の流動化＝解放（排出と吸引）：——こうした問題を把握しつつ、人口増加に説き及んでいるといえよう。この人口増加を可能ならしめるのは、「余剰となった人手」と「土地の余剰生産物」（前出）にほかならないのであるが、ヒュームは他方では、この「余剰となった人手」を「余剰労働（superfluous labour）」⁴³として捉えなおした上で——労働範疇の視点から——、「大衆の穀物倉庫、織物貯蔵所、兵器庫（a magazine of arms）、これらはいかなる国にあっても真の富（real riches）であり力であると認められるべきである。商業とインダストリとは蓄積された労働（a stock of labour）にほかならない。しかもそれは、……国家の非常時にはその一部を国家の用に転じることができるものである」⁴⁴とのべる。

みられるとおり、ここでヒュームは、“富”の内実を「蓄積された労働」とその産物とに求めているが、「兵器庫」をも“富”に含めているということに、われわれは特別に指目する必要があるだろう。ここでは、労働力人口の兵力への転換の可能性が指摘されているに過ぎないのであるが、実際のところ、ヒュームは随所で兵

⁴⁰ *Ibid.*, p. 262. 小松訳, 11-12ページ。

⁴¹ “Of refinement in the arts”, *op. cit.*, p. 281. 小松訳（下）39ページ。

⁴² “Of commerce”, *op. cit.*, pp. 261-262. 小松訳（下）11ページ。

⁴³ *Ibid.*, p.268. 小松訳（下）19ページ。

⁴⁴ *Ibid.*, p.268. 小松訳（下）20ページ。

力と人口」という問題に論及しており、ここに「ある種の富国強兵論」⁴⁵をみることもできる（人口政策における富国強兵の問題は先の「論点開示」においても示唆しておいたように、人口論において重要な論点であるのだが、この問題に関するヒュームの所論をここで吟味する余裕はない。後に改めてふれることになろう）。

ヒュームは上にみるように、啓蒙思想家に相応しく、近代社会を「未開状態」から離陸した社会として捉える。ヒュームは明らかに、歴史を未開社会と「文明社会」とに二分化し、前者から後者への発展（進歩）＝「文明化」の過程として描出しているのである（古代と近代の人口変動の比較という、ウォーレスの提起もまた、こうした二分法に基づくものといえよう）。このことは次の一文によって引証することができる。「今日のすべての進歩と洗練（refinements）が人間の生存を容易にし、繁殖と増加に役立つことはまったくなかったのであろうか。われわれの優れた機械的技術（skill in mechanics）；商業を大きく拡大した、新しい世界の発見；郵便制度の確立；為替手形の使用；——これらは技芸や産業発達、さらには人口の増加に極めて大きく役立っているように思われる。……それ故に、このような新しい発明の代わりにいかなる調整や制度もみいだすことはできないであろう。」⁴⁶

（下線は仲村）こうした歴史的過程はヒュームにあつては、「事物の最も自然な成り行き（the most natural course of things）」⁴⁷にはかならないのである。ヒュームはより広い視野から「文明化」＝「進歩と洗練」を把握し、人口増加の必然性を導出しているのである。こうした論述は蓋し、ウォーレス批判の決定版ともいべきものである。

この論述を一瞥してわれわれは、マルクスのいわゆる「資本の文明化作用（the great civilizing influence of capital）」⁴⁸を想起するのであるが、ここで両者の見解の異同を吟味する余裕はない。ともあれ、ヒュームによる近代的生産力の把握に刮目したい。ヒュームにあつては、産業革命の前夜という歴史的制約のため、道具から機械へという労働手段の発達とその革命的意義を組上に載せることができなかつたとしても、労働主体の主体的契機の変革、すなわち“インダストリ”の積極的意義を別決することができたのである（ただし、ここには労働主体と労働手段の明確な区別はない）。

こうした展開を改めて整理してみると、次のようになろう。人口変動について、ウォーレスは「奢侈の増大（奢侈品工業の発達）→農業人口の吸引→農業生産の減少→人口減少」というシエーマを描いて説明するのにたいして、ヒュー

⁴⁵ 坂本達哉『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由——』創文社、1995、213ページ。

⁴⁶ “Of the populousness of ancient nations”, op.cit., p. 417. 小松訳（上）88-89ページ。

⁴⁷ “Of commerce”, op.cit., p. 266. 小松訳（下）16ページ。ヒュームにおける“the most natural course of things”とアダムスミスのいう“natural course of things”とは、表現はまったく同じであるが、その意味するところは異なる。それはスミスにあつては、〈農業→工業→外国貿易〉という産業発展の順序として具現されるものであり、ヒュームのばあい、〈外国貿易→国内の商工業→農業〉という順序である。なお、スミスの“natural course of things”については、仲村『分業と生産力の理論』（前出）12-21ページ参照。

⁴⁸ マルクスは「資本の文明化作用」についてさまざまな角度から説明しているが、次の叙述が最も概括的である。「資本は、これらいっさいにたいして破壊的であり、たえず革命をもたらすものであり、生産諸力の発展、諸要求の拡大、生産の多様性、自然諸力と精神的諸力の開発利用ならびに交換を妨げるような、一切の制限を取り払っていくものである。」（『一八五七—一八五八年の経済学草稿』[前出]第2分冊、18ページ）

ムは〈外国貿易→国内貿易→国内工業→農業の発達〉という産業発展の「自然的な成り行き」を説きつつ、〈生産力の増進→人口（および兵力）と国富の増大〉という結論を導出している。ただ、ヒュームは近代的生産力を把握し、人口増加の論証に成功したとしても、ウォーレスの所論を完全に論駁しつくしたとはいえない。

ウォーレスは上述のように、土地所有の問題に踏み込み、近代社会（重商主義）批判に急なあまり、近代社会の「人口減少」という結論を短絡的に導出したのであるが、土地問題に視点を据えて人口問題にアプローチするという方法は、それ自体としては当を得ているといわなければならない。ウォーレスは正当にも、マルクスのいう「いわゆる本源的蓄積」⁴⁹における土地問題（土地所有をめぐる問題）に指目しているのである。もちろん、それを資本の「本源的蓄積」の問題として把握することはできなかったのであるが、すぐれて階級関係を表示する所有問題に指目したという点に限定していえば、その方法論はヒュームに勝る——近代的生産力の把握が欠落しているとはいえ——といえよう。念のため付言すれば、ヒュームにあっても土地所有の「不平等」そのものは認識されていたのであるが、ヒュームはそこに留まっているに過ぎないといわなければならない。

いずれにせよ、本源的蓄積期における人口問題は土地の収奪と農民層の分解、農業労働力の流動化（解放）＝賃労働者化と浮浪者化等々の問題にほかならなかったものであり、したがって、

当時の経済問題は人口問題として顕現したのである。この人口問題は、農工分離の過程における労働力の流動化過程（資本・労働関係の形成過程）における「過剰人口」問題というべきものであり——産業資本確立期における人口問題が資本・賃労働関係における「労働力の過剰」の問題として現れるのだが——、一方では農業問題として、他方では労働力（労働力人口）問題として顕れたのである。そして、浮浪者（ルンペン・プロレタリアート）や受救貧民の問題が政策課題として登場し、後述のように、マルサス人口論において救貧法の問題が大きな位置を占めるのも、こうした歴史的文脈においてである。

かかる歴史的過程において、ヒュームは生産力視点から——近代的生産力を把握しつつ——人口論にアプローチするのにたいして、ウォーレスとゴドウィンはいわゆる生産関係視点から土地問題に視点を据えながら、特殊歴史的な人口問題を俎上に載せるのである。そして、ゴドウィンはウォーレスの視点（方法）を引き継ぐのであり、われわれが“ウォーレス＝ヒューム論争”を跡づけるのも、ゴドウィンにおける〈「土地独占」→人口減少〉という把握の理論的文脈と客観的過程の歴史的な文脈とを明らかにするためである。ゴドウィンはウォーレスと共通して、現存社会批判の武器として——マルサスとはまったく逆に——人口論を展開するのであるが、未来社会の人口変動については異なる道をたどることになる。

⁴⁹ マルクスは多くの資料を紐解き、本源的蓄積の展開とその歴史的意義について、次のように簡潔にまとめている。「教会の横領、国有地の詐欺的譲渡、共同地の盗奪、横領と容赦ない暴行とによって行われた封建的所有や民族的所有の近代的所有への転化、これらはみなそれぞれ本源的蓄積の牧歌的な方法だった。それらは、資本主義的農業のための領域を占領し、土地を資本に合体させ、都市工業のためにそれが必要とする無保護なプロレタリアートの供給を作り出したのである。」（『資本論』大月書店版、②、1967、959ページ）

(2)

われわれは次に、ゴドウィンが「平等な制度」に関連して論及している、もう一つの人口問題についてみるとしよう。まず、次の一文に刮目したい。「人間社会の本性の中には一つの原理があって、規制を定めるというやり方で干渉されるのが最も少ない時には、それによってあらゆることはその水準に向かい、最も幸運な方法で進むように思われる」⁵⁰と。ゴドウィンはここでもまた、「一つの原理」にふれているが——先の引用文とは異なる文脈において——、叙述はあまりにも抽象的であるので、他の箇所の叙述と重ね合わせてその含意を少しばかり敷衍すれば、ゴドウィンのいう「平等な制度」は「規制も監督も必要としない」⁵¹のであるが、そうした社会にあっては、人口の動態は「わずかな変化しかきたさない——人口水準（人口変動）は、「最も幸運な方法で進む」——ということである。別言すれば、「事態が正常に進む時には、一国の住民の数が、生存手段の便宜を越えて大きく増加することは、おそらく決して見られないであろう」⁵²ということであり、人口は「それ自身の水準」をみいだす⁵³ということである。かかる主張は文脈から推して明らかに、「平等な制度」における人口変動に関するものである。いずれにせよ、この人口不変論ともいべき所論は、先にみた J. S. ミルの「静止人

口」論に連なるものといえよう（ゴドウィンにおいてはミルとは異なり、未来社会の人口変動が問題とされているのだが）。

こうしたゴドウィンの所論は実のところ、ウォーレスの議論への反論としてのべられたものであることに指目すべきである。両者は現存社会批判については共通しながらも、未来社会（「平等な制度」）における人口動態についてはまったく異なる結論を導出しているのである。ゴドウィンは、ウォーレスは平等論を「推賞」しながらも、「続いて起こるはずの過剰人口」において、この全体を覆し彼を無関心や絶望へと引き戻す議論をみいだす⁵⁴とのべ、これを批判する。だが、さらなる論及はなされていないので、われわれはウォーレス自身の展開に即して、少しばかり吟味するとしよう。

ウォーレスは近代の落し子にふさわしく〈知〉を重要視しつつ、現存社会批判と未来社会論を繰り広げる。そして、未来社会の構想を18か条からなる「より完全な憲法（a more perfect constitution）」に纏め上げて提示する⁵⁵。これを一読してわかることは、この憲法には〈平等〉とともに〈労働の尊厳〉という赤い糸がつかぬいている（謳われている）ということである（結婚年齢の制限などの問題点を含んではいるが）。ここでこのことを特別に強調しておきたい。ウォーレスはさらに、トマス・モアのユートピアを範例としながら、自らの“ユートピア”

⁵⁰ *Political Justice*. Vol. II, p.516. 白井訳, 99ページ。

⁵¹ *Ibid.*, p.497. 白井訳, 85ページ。

⁵² *Ibid.*, p.516. 白井訳, 99ページ。

⁵³ *Ibid.*, p.518. 白井訳, 100ページ。

⁵⁴ *Ibid.*, p.515. 白井訳, 98ページ。他の箇所において、次のような叙述がみいだされる。「ヒュームの同時代人でその論敵ウォーレスは、……平等な制度の賛辞に多くの言葉を費やして、ただ地上が人口過剰になるという恐怖からのみ、それを見棄てる。」(*Ibid.*, p.460. 白井訳, 57ページ [注])。的確な批評である。

⁵⁵ R.Wallace, *Various prospects of mankind, nature, and providence*, 1758.reprinted by A.M.Kelley, 1969. pp.41-45.

の核心を次のように展開する。「私有財産はあってはならない。各人はみな公衆のために働くべきであり、また公衆によって支えられるべきである。人々はすべて第一級の水準にあるべきであり、各人の労働の果実は社会のすべての人々の快適な生活に役立つものでなければならない。そして、一人ひとり何かをなす義務があるが、とはいつても、過酷な労働で苦しむようなことがあってはならない。」⁵⁶と。みられるとおり、ここで特徴的なことは、私有財産制度の否定にとどまらず、何よりも労働における平等性、労働の質——默示的に、〈労働の尊厳〉とその洗練——が提示されているということである。こうした点は後にみるように、ゴドウィンによって継承されるのである。

だが、ウォーレスのユートピアは人口問題の導入によって、反転する。ウォーレスによれば、人類が「平和で調和のとれた状況」において生活し、しかも「空間（場所）と食料が豊富である」かぎり、人口は著しく増加する⁵⁷。なぜならば、「完全な政体（a perfect government）」にあっては、子どもの世話がよく行き届き、また、すべてのことが人口増加にとって好都合であるから。その結果、「人類 [人口] は桁外れに増加し、ついに地球は人びとで溢れ、膨大な住民を扶養できなくなるであろう。」⁵⁸。

増大する人口の扶養に関連して当然に、土地の肥沃度の増大と耕作面積の拡大——未耕地の開拓——という、土地（耕作地）をめぐる質と量の問題が俎上にのぼることになる。このうち土地の肥沃度についていえば、それは過去の経験に照らして不変であるとウォーレスはいう。また、新しい植民地における未耕地の開拓もいずれは尽きるであろう⁵⁹。そうであるとすれば、人口抑制のために非人間的な（残酷な）さまざまな手段——結婚の制限、嬰兒殺しなど——を講じなければならないが、一方、この社会にあっては、人間の自然的な情欲や食欲はしっかりと根づき、諸個人と人類のいずれの幸福をも求める最善の目的に役立っているので、こうした規制は暴力や戦争を引き起こすことにならざるをえない。かくして、「ユートピアの政体の平穏と大いなる祝福は終わりを告げ、戦争または、悲惨で反自然的な風習がおこなわれるようになり、最もすぐれた法律と最も賢明な施策があるにもかかわらず、人間 [人口] の増大や知識の進歩、土地の耕作が停止することになろう。」⁶⁰ 儂くもユートピア社会は崩壊するのである。

ゴドウィンの「平等な制度」への批判の武器として「人口の原理」を定立するマルサスはまさしく、マスサス自身は明示していないが⁶¹、ウォーレスのかかる展開のなかに平等主義批判

⁵⁶ *Ibid.*, p.46.

⁵⁷ *Ibid.*, p.46.

⁵⁸ *Ibid.*, p.114.

⁵⁹ *Ibid.*, pp.116-117.

⁶⁰ *Ibid.*, p.119.

⁶¹ ただ、マスサスは自らの「提示する重要な議論」は新しいものではないことを認めたくえで、次のようにべているにすぎない。「それが基礎とする諸原理は、一部はヒュームにより、またそれ以上に十分にアダム・スミス博士により、説明されたことのあるものである。それは、正しい評価をもってでも、あるいはまた、最も強力な観点においてでもなかったが、ウォーレス氏により、現在の問題に対して提出され、適用されたことがある。」（*Principle of Population*, p. iv. 永井訳、20ページ。）

の論理を「発見」したのである。そして、K. スミスの適切な表現を借りると、「制限された土地 (earth), 制限された土地の肥沃度, そして絶えざる人口 (mankind) の増大: これらは決定的要素である。マルサスはただ、比率を付け加えなければならなかっただけである。」⁶² つまるところ、マルサスはウォーレスの所論に人口増大の比率 (等比数列と等差数列) を導入したにすぎないということである (この問題は後に改めてふれることになる)。

こうしてみると、ウォーレスの「人口論」こそ、ゴドウィンとマルサスの「人口論」を触発したものにはかならない。ゴドウィンとマルサスのいずれにあっても、ウォーレスの議論をベースにして「平等な制度」における人口論にアプローチしているという点において共通しており、二人の問題意識 (課題意識) は通底しているといわなければならない。ウォーレスの所論はゴドウィンとマスサスとの結節点に位置しているのである。もちろん、「平等な制度」を擁護するためにウォーレスを批判するゴドウィンの立場と、「平等な制度」を批判するためにウォーレスの所論を援用するマスサスの立場は全く逆なのであるが、いずれにしても、ゴドウィンのウォーレス批判の方が先行しているので、マスサスはこのことを踏まえただけで、ゴドウィン批判を展開したことになる。

ゴドウィンのばあい上述のように、「自由で平等な社会」における人口動態については、それ自身の「水準」をみいだすというように、楽観的な展望を示すのであるが、そうした「水準」をみいだしえないばあいについても言及して、

次のようにのべる。「地球の居住可能地の四分の三は、今耕作されてはいない。耕作においてなさるべき進歩、土地が受けうる肥沃度の増大は、これまでのところでは、計算上何らかの限界にとどめられるということはある。なお人口が増大し続けて幾万世紀が過ぎ去るかもしれず、しかも地球はその住民を維持するのに十分であることがわかるかもしれない。それゆえに、そのように遠い危険性をもとに失望するというのは、無用のことであろう。人類進歩の合理的な予測は、無制限であって、不変ではない。……さまざまな種類の物理的奇禍が、知性の進歩的な性質を妨げるかもしれない。しかし、これらを問題の外に置けば、このように遠い一つの危険は、それを実際に適用するには十分間に合う時期に現れるであろうような救済の機会に (…………) まかせてしまうことが、確かに最も合理的であろう。」⁶³ (下線は仲村) ここでゴドウィンは、ウォーレスが「人口減少」の一要因と看做した「未耕地の存在」や、これもまたウォーレスが否定した「肥沃度の増大」——耕作における「進歩」の結果としての——などを、未来社会における過剰人口問題を解決する要因として捉えている。そして、より広い見地から人類の「進歩」や「知性の進歩的性質」を高唱しているのである。

下線の部分についていえば、これは明らかにウォーレスの主張するところを批判したものとみることができる。マルサスもまた、ここでいう「遠い危険性」に関連してウォーレスを批判している。マルサスは次のようにのべる。「この論議 [過剰人口の論議] がその平等の全体系

⁶² K. Smith, *The Malthusian controversy*, Routledge & Kegan Paul, 1951. p. 22.

⁶³ *Political Justice*, Vol. II, pp.518-519. 白井訳, 100ページ。

を破壊するほど重要だと考えたウォーレス氏でさえ、全地球が菜園のように耕作され、生産の増加はこれ以上不可能だということになるまで、この原因から何らかの困難が生じるであろうことを知らなかったようだ。]⁶⁴ みられるとおり、マルサスはゴドウィンとは逆の立場から、ウォーレスを批判しているのである。マルサスにあっては、「平等な制度」における「過剰人口」は遠い将来における「危険性」の問題ではないのであり、したがって、問題を先送りするウォーレスは批判されなければならないのである。

これまでみてきたように、ゴドウィンの立場は私有財産制度の否定と平等な社会の展望という点においてウォーレスと通底しているのであるが、二人の所論の分水嶺は過剰人口問題の把握の仕方であったのである。さらにいえば、人間把握の仕方が大きく異なっていたのである。ゴドウィンにあっては、その人口論の基底に固有の人間発達論——理性と進歩を高唱する——が定礎されているのである。この点についてはすでに上において、その一端にふれたところであるが、以下、文脈において必要なかぎりにおいて、少しばかり敷衍するとしよう。

（3）

もしもより貧困な階級において……、徳や分別、自尊心の働きがみられないとするならば、それは、彼らがその下で呻吟する抑圧によって絶望的になっているからである。……このことを、わたくしと『人口論』の著者 [マルサス] との間の唯一の重要な問題である社会の状態、すなわち、高度な平等や熱い善行の精神が価値あるものと看做されている社会に

適用してみるとしよう。われわれは、この社会においては、徳や分別、自尊心が人口の増加にたいする大きな抑制 (checks) のひとつとして働くことをみいだす。⁶⁵ (下線は仲村)

ゴドウィンはここで、人口動態に関するマルサスとの間の基本的な争点についての的確に捉えているといえよう。つまり、前述のマルサスの三つの命題に即していえば、第三の命題、すなわち「人口の優勢な力は、不幸または悪徳を生み出さないでは抑制されない」というマルサスの命題こそ最重要の争点にほかならないのである。言い換えれば、人口抑制の可能性とその内実が争われているのである。われわれはさしあたり、ゴドウィンは現存社会における抑制と未来社会——「高度な平等や熱い善行の精神が価値あるものと看做されている社会」——における抑制とを区別しているという点を確認して、まず、この抑制にかかわるかぎりにおいて、ゴドウィンにおける人間把握の特徴について簡潔にみるとしよう。

ゴドウィンの社会理論（社会哲学）において特徴的なことは、固有の人間把握が赤い糸として貫いているということである。われわれはまず、ゴドウィンの次の叙述に刮目するとしよう。ゴドウィンはのべる。「健全な理論と真理とは、十分に共有されるばあい、常に誤謬に勝利するに違いない。：健全な理論と真理とは、そのように共有されることが可能である。：真理は全能である。：人間の悪徳と道徳的弱点は克服不可能なものではない。：人間は完成することが可能であり、別言すれば、絶えざる進歩を遂げ

⁶⁴ *Principle of Population*, pp.142-143. 永井訳, 93ページ。

⁶⁵ W. Godwin, *Thoughts occasioned by the perusal of Dr. Parr's Spital Sermon, preached at Christ church, April 15, 1800: Being a reply to the attacks of Dr. Parr, Mr. Mackintosh, the author of An essay on population, and others.* London, 1801. p.73. (以下, *Thoughts occasioned by the perusal of Dr. Parr's Spital Sermon* と略す)

ることができる」⁶⁶と。この一文は、人間の自発的行為は常にその理解力に一致するということを強調したうえで、人間の進歩（human improvement）の「希望と展望」を指し示すものとして提示したものである。この5つの「命題」を一読して明らかなように、ゴドウィンは人間の知的能力に全幅の信頼を寄せる。知的能力の獲得する真理は「全能」であり、そうした能力をもつ人間は完成可能である。なぜならば、真理は誤謬に勝利するのであるから。

このような所論をさらに敷衍するために、本節冒頭に引いた一文と重ね合わせてみると、次のようである。ゴドウィンによれば、「健全な理論と真理」は人びとによって共有されることが可能であるのだから、真理の「一般的な普及」は「一般的な進歩」を生む。したがって、進歩も個人的ではなく、「公的なもの」となり、かくして、人びとは対象を「真の価値」によって評価することが可能となる。「正義と公正の感情」もまた、共有されることになる。

こうしてみると、ゴドウィンの人間把握におけるキーワードは、〈人間の進歩（human improvement）〉および〈人間の完成可能性（perfectibility）〉（前出）であるということができよう。ただ、ゴドウィンは「[人間が]完成可能である（perfectible）ということは、完全に到達することができるということを意味しない。むしろ、この言葉は、たえず改善され、永久に進歩するという能力を表わすものとするのが適しているように思われる」⁶⁷とのべているので、

この二つのものはほぼ同義語と看做すこともできよう。このことは、ゴドウィンが後により厳密に定義している論述によっても引証することができる。ゴドウィンはのべる。「わたくしはいまや完成可能性という言葉で、その意味を少しも変えないで、知識・道徳的性向・社会制度における人間の進歩的性質と言い換えた」⁶⁸と。

ところで、ゴドウィンのいう「理性」もこうした文脈に位置づけられているのである。ゴドウィンは『政治的正義』の第3版において新たに「諸原理の要約」（8項目）を付け加えるが、そのなかで理性について、次のようにのべている。「Ⅵ 人びとの自発的な行為は、彼らの感情の支配下にある。理性は、独立した原理ではなく、われわれを行動に駆り立てる傾向をもっていない。実際の見地からすれば、それはさまざまな感情を単に比較考量するだけである。理性は、われわれを行動に駆り立てることはできないけれども、さまざまな刺激のもつ価値を比較して、われわれの行動を規制すると考えられる。それゆえ、われわれは理性の進歩にこそ、われわれの社会状態の進歩を期待すべきである。Ⅶ 理性は、知識を深めることによって、明晰強力なものとなる。知識を深める際のわれわれの前進の範囲には、限りがない。そこで、次のようにいえる。1. 人間の発明と、社会における生活の様式は、永久に進歩しうる。2. ある特定の考え方や生活の条件に、永久性を与えようとする制度は、有害である」⁶⁹と。

⁶⁶ *Political Justice*, Vol. I, p.86.

⁶⁷ *Ibid.*, p.93.

⁶⁸ *Thoughts occasioned by the perusal of Dr. Parr's Spital Sermon*, op.cit., p.46.

⁶⁹ *Political Justice*, Vol. II, p.xxvi. 白井訳、26ページ。“improvement”をここで「改善」と訳すのは適切ではない。この訳語を「進歩」に改めた。

ここでいう「自発的な行為」はゴドウインの必然論にかかわるものであるが、このことについてはさしあたり措くとして、まずもって刮目すべきは、ここでは理性にたいする感情の優位性がうたわれ、理性は全能なものとして措定されていないということである。理性は「独立した原理」ではなく、人間の行動に駆り立てる感情や「刺激の持つ価値」を比較考量しつつ行動を「規制する」役割を担うにすぎないのである。とはいえ、理性は人間の行動の羅針盤となるのであって、社会状態の進歩もこの理性に期待せざるをえないのである。そして、ここでいう理性の進歩は人間の完成可能性を含意しているのであり、これが社会状態の「改善」=社会の完成可能性を推進する力となるということである。このように読み取ることができるのであれば、ゴドウインにあっては、〈人間の完成可能性〉と〈社会の完成可能性〉とは一体のものであるということもできよう。このばあい、何よりも人間の主体的能力——完成可能性をもつ人間の能力——が重要な意義を有するといえよう。

もうひとつ刮目すべきは、理性は「独立の原理」ではなく、知識によって進歩するものであるということである（知性もまた、「進歩する不断の傾向」をもつとされる⁷⁰⁾）。ゴドウインがこのように理性の基底に知性をすえるのも、ゴドウインにあっては「真理は全能」（前出）だからである。こうして、ゴドウインは随所で

知性に論及し、次のような言葉を鏤めている。「知性 (understanding)」「人間の知性 (human understanding)」「知的人間 (intelligent beings)」「知的進歩 (intellectual attainments)」「知性の指図 (dictate of understanding)」「知性の快楽 (pleasures of intellect)」「知的感情の快楽 (pleasures of intellectual feeling)」「洗練と知識の快楽 (pleasures of refinement and knowledge)」「偉大な知性の力 (great intellectual power)」「知識の育成 (cultivation of intellect)」など。

ゴドウインの真理と知性（知性の進歩）への全幅の信頼こそ、未来社会にたいする楽観主義の基礎となるものである。例えば、次の叙述をみよ。「われわれが確立しようと試みてきたすべては、このような社会の状態 [自由で平等な社会] は理性に一致し、そして、正義によって指示されているということ、そしてその結果、人類の間の科学と政治的真理は、この社会の建設と密接に結びついている、ということである。知性に固有な傾向は、進歩である。そこでもしこの固有な傾向が作用するにまかされ、自然の驚異や野蛮の汎濫がその進行を阻止しないとすれば、われわれが描いてきたような社会状態は、いつか到来するに違いない。」⁷¹⁾（下線は仲村）こうして、「人間の進歩」の核心は「知性の進歩」にはかならないのである。

みられるとおり、ゴドウインの未来社会は理性の導くところであり、また、正義の指し示す

⁷⁰⁾ *Ibid.*, p.536. 白井訳, 113ページ。

⁷¹⁾ *Ibid.*, p.475. 白井訳, 69ページ。なお、ゴドウインが知性と理性を重要視していることから、ゴドウインにおける「改革の主体は第一に知識人」（鈴木亮「ゴドウインにおける『政治的正義』の構造（二）」『商学討究』[小樽商科大学]第11巻第3・4号, 1961.3, 56ページ）であるとする指摘は受容しがたい。そうした叙述は見当たらない。また、「ゴドウインの理想社会は、生産者の社会というより、むしろ知識人によって構成される」（水田珠枝「変革思想としての無政府主義——ゴドウイン『政治的正義』における人間変革の問題——」『法政論集』[名古屋大学]第13号, 1959.12, 85ページ）とする主張も受容しがたい。この問題については後に改めてふれることになる。

方向にほかならないのであるが、ここに貫く太く赤い糸はいわゆる「進歩のイデオロギー」である。だが、このイデオロギーはひとりゴドウィンのものではないという点に留意する必要がある。この点に関連して、E.J. ホブズボームは次のようにのべている。「[産業革命と市民革命という二重革命において] 重要性をもった世界観は一つしかなく、それ以外の多くの見解は……その否定的な批判者であった。唯一の世界観とはすなわち、勝ちほこった、合理主義的な、人道主義的な十八世紀『啓蒙主義』である。その闘士たちは、人類史というものは、衰退あるいは水平的波動よりもむしろ、上昇であるという確固たる（しかも正しい）信念をもっていた。彼らは、自然にたいする人間の科学的知識と技術的支配が、日ましに大きくなっていくことを、看取しえた。理性を同じように適用することによって、彼らは人間の社会と個別の人間が完成されうると信じていたし、また、歴史によって、そのように完成される運命にあると信じていた。これらの諸点について、ブルジョア自由主義者と、革命的なプロレタリア社会主義者とは、一致していた。」⁷²

「ブルジョア自由主義者」と「革命的なプロレタリア社会主義者」との「一致」という点については留意すべき問題を含んでいるが、いずれにせよ、この一文は恰もゴドウィンの思想そのものを評定しているかのようである。まさしくゴドウィンの思想の生誕の地は啓蒙主義であり、その「闘士」の一人として「ブルジョワ自

由主義者」——より正確に言えば、急進的な「ブルジョア自由主義者」——とみなしうるのである。同様にわれわれは、ゴドウィンの同時代人であり、ゴドウィンとともにマルサスによって鋭利な批判の矢を浴びたコンドルセに指目する必要がある。

コンドルセはゴドウィンと同じく人間の完成可能性に全幅の信頼をよせ、次のようにのべている。「自然は人間の能力の完成に対してはなんらの限界も、付していないということ、人間のこの完成の可能性は真に無限であるということ、この可能性の進歩は、今後これを阻止しようとするすべての力から独立したものであり、自然によってわれわれが置かれているこの地球の存続期間以外にはなんらの限界もない……」⁷³ こうした人間精神の「前進」と「進歩」は「恒久的な自然法則」によって「保証」されるのであり、ここに貫く赤い糸はゴドウィンのばあいと同様に、真理である。まさしく、「真理のみが持続的な勝利を獲得せねばならない」のである。さらにいえば、自然が〈知識の進歩〉とく自由、道徳、人間の自然的権利にたいする尊敬の進歩とを「分かちがたく結びつけている」のである。こうして、この二つの進歩こそ「真の財産」にほかならないのであり、「人間性の完成」と幸福とを促進するのである⁷⁴。

コンドルセがこのように、人間精神の「前進」と「進歩」について極めて楽観的であるのは、この「前進」と「進歩」は「恒常的な自然法則」（前出）によって「保証」されると考えるから

⁷² E.J.Hobsbawm, *The age of revolution: Europe 1789-1848*, (first edition 1962) Abacus, 1978, p.286. 安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命——二重革命の時代——』岩波書店, 1968, 382ページ。

⁷³ A.N. コンドルセ『人間精神進歩の歴史』(*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*, 1793-94) [前川貞次郎訳] 角川書店, 1966, 18ページ。

⁷⁴ 同前, 24ページ。

である。コンドルセはひとつの必然論に立脚しているのである。この点についてコンドルセは端的に次のようにのべている。「数学的、物理的諸科学が、われわれのもっとも簡単な要求のために用いられる技術の完成に役立つのと同じように、道徳・政治的諸科学の進歩は、われわれの感情や行動を指導する動機にたいして同じ作用をなすものであり、これもやはり、自然の必然的秩序のなかにあるというべきではなからうか」⁷⁵と。つまるところ、コンドルセは自然科学と同様に、「道徳・政治的諸科学」の自律的な進歩（発達）に期待を寄せているのであって、それ以上のものではない。われわれはここに、コンドルセ固有の進歩史観をみることができよう。

人口問題についても、コンドルセは科学の進歩という側面からアプローチする。科学の進歩により、土地の肥沃度が増大し、また産業も進歩するのであるが、「人類の肉体組織の結果よりして人口の増加が可能」になり、人口の増加が生活手段の増加を超えることによって、「本当の退歩」が生じ、「周期的な貧困」の原因となるのではないかという⁷⁶。だが、この点についてのコンドルセの論述は曖昧である。コンドルセは、人口増加から未来社会——上述のように、ひとつのユートピアなのだが——の崩壊を説くウォーレスとは異なり、改めて理性の進歩と科学・技術の進歩とに信頼を寄せつつ、次の

ようにのべる。「生活物資の可能量、その結果、可能な最大人口にはひとつの限界は、あるといえはありうるだろう。しかし、それゆえに、自然にも反し、またすでに生命をうけている人間（存在）の一部の社会的繁栄にもきわめて反しているあの時期尚早な破壊が、その結果として生じてはならないのである」⁷⁷（下線は仲村）と。この一文は、末尾の一節を一瞥するまでもなく、ウォーレスを念頭において叙述されたものであるとみて間違いないと思われるが、いわゆる「最大人口」を設定している点が刮目される。そして、これをはるかに遠い将来の問題として扱い、論理的な解明を回避している。ただ、コンドルセは理性の進歩を確信する立場から、何らかの道徳的抑制を——黙示的ではあるが——提示しているとみることもできよう⁷⁸。いずれにしても、未来社会における人口動態の問題は、これまでみてきたウォーレスとコンドルセのいずれにおいても、ひとつのアポリアとして意識化され、その問題の前に佇むほかはなかったのである。

ゴドウィンにあっても、『政治的正義』においてはかなり曖昧であり、「共同社会から生じる刺激や抑制は、その作用が全能である」（引用済み）というように、抽象的に抑制の問題に言及し、これに加えて、土地の肥沃度の増大の問題にふれるにすぎない（ただし、刺激や抑制は「全能である」とする点は看過できない）。

⁷⁵ 同前，247ページ。

⁷⁶ 同前，241ページ。

⁷⁷ 同前，242ページ。

⁷⁸ 次の叙述参照。「人間の道徳的感情の性質と発展、この原則に行為を適合さず自然的な動機、個人としてであれ、社会の一員としてであれ、自分の利害、これらについて人びとがよく明らかにしうる質的な進歩をしなければならぬ。……暴力的な情念は、時として誤れる計算によってのみ人びとが身をゆだねているような習慣の結果であるか、または、このような情念の最初の動きに反抗し、それを和らげ、その方向を変じ、その活動を導くもろもろの方法を、知らないということの結果ではないだろうか。」（同前，246）

しかしながら、この書がマルサスの鋭い批判を受けるに及んで、本節冒頭の引用文にみるように、マルサスとの間の争点はこの抑制の問題であることを明確に析出し、マルサス批判を展開する。ゴドウィンはその結論部分において、次のようにのべている。「われらが著者『人口論の著者マスサス』の著作の基本原則である人口と食糧との比率は否定しえない原理であり、政治経済学にとって貴重な収穫のひとつであると思う。これらの前提から導出された結論は、人口の増加にたいする十分な抑制は悪徳と悲惨のみであるということ、さらには、社会の並はずれた改革の進路にはわれわれがそれを克服しようとする希望を決して抱くことができないような性質の障害が横たわっているということである。わたくしはこうした結論には納得がいかない。……過去の世界の歴史をみても、悪徳と悲惨のみが人口を規制し制限したということにはなかった。未来についてみても、わたくしは、最も明白な分別 (prudence) の規則に服するところの人間の徳に絶望することはできないし、あるいは、まだ知られていない救済策をみいだすことに絶望することもできない、……」⁷⁹

ここにはゴドウィンのいう〈人間と社会の完成可能性〉が人口論に適用されている。ゴドウィンは前述のように、完成可能性を「知識、道徳的性向、社会制度における人間の進歩的性質」と言い換えているのであるが、ゴドウィンが「徳や分別、自尊心が人口の増加にたいする大きな抑制のひとつとして働く」(前出)という見地がここに適用されているのである。すなわち、この「道徳的性向」における進歩が人口動

態に作用することがここに端的に表出されているのである。改めて敷衍するまでもなく、「道徳的性向」の進歩は「知識」および「社会制度」の進歩によって促迫されるのであるが、こうしたゴドウィンの見地は一貫しており、晩年にあっても変わることなくこれを堅持し、神や「自然の法則」を持ち出して「悪徳と悲惨」を論ずるマルサスを痛烈に批判している⁸⁰ (この批判については次節において、改めてふれることになる)。いずれにせよ、ゴドウィンのいう「道徳的性向」の進歩の問題は、マルサスの「道徳的抑制」にも直截にかかわる問題であることは、次節においてみるとおりである。

以上われわれはゴドウィンの人口論を固有の人間把握との関連において吟味してきたのであるが、なお、いくつかの論点が残されている。これらの論点については、次節においてマルサス人口論の基本的性格を吟味する際に、マルサスの所論と交差させながら論及することになる。

⁷⁹ *Thoughts occasioned by the perusal of Dr. Parr's Spital Sermon*, op.cit., pp. 76-77.

⁸⁰ W. Godwin, *Of population: An enquiry concerning the powers of increase in the numbers of mankind*; —being an answer to Mr. Malthus' essay on that subject. 1920. reprinted by A.M. Kelley, 1964, p.612ff.